

# 鑑賞者の文化的背景が芸術感性に与える影響

若林 正浩  
佐藤 宏道  
内藤 智之

大阪大学大学院生命機能研究科  
大阪大学大学院医学系研究科  
大阪大学大学院医学系研究科

芸術経験の生起に関わる人の処理経路は、少なくとも知覚的処理、認知的処理、感情的処理の3つの経路が存在すると考えられている。芸術作品を含めた画像刺激に対する印象は、鑑賞者の文化的背景に依存して大きく異なることが知られているが、各処理経路における文化的影響については不明な点が多い。本研究では、日本人および欧州人を被験者とし、芸術感性において鑑賞者の文化的背景が大きく影響を与える処理経路を同定することを目的とした。被験者は40枚の風景画（浮世絵、西洋画、各20枚）に対し、既知感および9個の形容詞対を用いた印象評定を行なった。評定に用いた形容詞対は、各処理経路とよく対応すると考えられるものであった。実験の結果、全ての処理において鑑賞者の文化的背景と絵画カテゴリには交互作用があり、絵画カテゴリごとに文化差の影響が異なることが示された。また、鑑賞者の文化的背景は知覚的処理にも影響することが示唆された。

Keywords: aesthetic experience, cross-cultural, perception, cognition, emotion.

## 問題・目的

視覚芸術作品における印象形成には、知覚的処理、認知的処理、感情的処理の3つの処理経路が存在するとする美的経験モデルが提案されている (Leder, Belke, Oeberst, & Augustin, 2004)。美的経験モデルでは、文化差は主に認知的処理と感情的処理に影響を与えると考えられているが、実証的な証拠はほとんど報告されていない。

本研究では、日本人と欧州人を被験者とし、被験者の文化的背景が知覚、認知、感情的印象に与える影響を評価することで、芸術印象形成における文化差の影響を検討した。

## 方法

**実験参加者** ドイツ語を母語とする欧州人被験者33名（女性17名、平均年齢26.2±4.1歳）、日本人被験者39名（女性26名、平均年齢20.3±1.2歳）が本実験に参加した。

**刺激** 風景画40枚（西洋画20枚、浮世絵20枚）を視覚刺激として用いた。絵画の内容は西洋画と浮世絵で対応するように選定した。

**手続き** 視覚刺激に対する既知感の評価および9種類の形容詞対による印象評定課題を行った。実験に用いられた形容詞対は先行研究において知覚的、認知的、感情的処理経路によく対応すると考えられるものであった（表1）。評定は、欧州人

被験者に対してはドイツ語で、日本人被験者に対しては日本語で実施した。評価形容詞の翻訳は、複数の研究員によるバックトランスレーション法を用いた。

実験参加者はCRT上に提示された絵画の印象を各形容詞について7段階で評定した。被験者はまず、視覚刺激に対する既知感の評価を行った。その後、9形容詞対による印象評定課題が行われた。刺激、形容詞の順は実験参加者ごとにランダムであった。実験参加者は本試行の前に練習試行を行った。練習試行で用いた刺激と形容詞は、本試行と異なるものを使用した。

表1 実験に用いた形容詞対

	ドイツ語	日本語
既知感	Bekannt - Unbekannt	知っている - 知らない
	Hell - Dunkel	明るい - 暗い
知覚的処理	Visuell Klar - Visuell Verschwommen	はっきりしている - ぼやけている
	Hohe räumliche Tiefe - Keine räumliche Tiefe	奥行きのある - 奥行きのない
認知的処理	Schön - Hässlich	美しい - 醜い
	Künstlerisch - Unkünstlerisch	芸術的な - 芸術的でない
	Verständlich - Unverständlich	理解できる - 理解できない
感情的処理	Fröhlich - Traurig	嬉しい - 悲しい
	Aufgeregt - Ruhig	興奮している - 落ち着いている
	Gefällt mir - Gefällt mir nicht	好き - 嫌い

## 結果

欧州人被験者と日本人被験者で実験に用いた絵画の既知感を比較したところ、西洋画においては欧州人の既知感が ( $t(70) = 4.66, p < .001$ )、浮世絵

においては日本人の既知感が有意に高かった ( $t(70) = -2.42, p = .02$ )。絵画刺激全体の既知感を比較したところ、欧州人と日本人間に有意な差は見られなかった ( $t(70) = 1.20, p = .23$ )。

知覚的、認知的、感情的処理における被験者の文化差の影響を検討するため、背景文化を被験者間要因、絵画カテゴリを被験者内要因とする、Wilksの $\Lambda$ を用いた2要因多変量分散分析を知覚的、認知的、感情的処理に対応した形容詞対グループごとに行なった。

知覚的処理では、鑑賞者の背景文化の主効果は有意でなかった ( $F(3, 68) = 1.97, p = .13, \Lambda = .92$ )。絵画カテゴリの主効果 ( $F(3, 68) = 98.34, p < .01, \Lambda = .19$ )および、交互作用 ( $F(3, 68) = 4.62, p < .01, \Lambda = .83$ )は有意であった。

認知的処理では、鑑賞者の背景文化 ( $F(3, 68) = 7.69, p < .01, \Lambda = .75$ )、絵画カテゴリ ( $F(3, 68) = 13.19, p < .01, \Lambda = .63$ )の主効果が有意であり、交互作用も有意であった ( $F(3, 68) = 6.74, p < .01, \Lambda = .77$ )。

感情的処理では、鑑賞者の背景文化の主効果は有意傾向を示した ( $F(3, 68) = 2.58, p = .06, \Lambda = .90$ )。絵画カテゴリの主効果 ( $F(3, 68) = 10.89, p < .01, \Lambda = .68$ )および、交互作用 ( $F(3, 68) = 5.17, p < .01, \Lambda = .81$ )は有意であった。

さらに、形容詞ごとに、被験者間要因を鑑賞者の背景文化、被験者内要因を絵画カテゴリとした2要因分散分析行なった。

知覚的処理では、“はっきりしている”において鑑賞者の背景文化の影響が有意であり ( $F(1, 70) = 6.02, p = .02, \eta^2 = .04$ )、欧州人が日本人と比べ高い得点をつけていた。また“明るい”において交互作用が有意であり ( $F(1, 70) = 9.24, p < .01, \eta^2 = .05$ )、単純主効果検定の結果、浮世絵において、欧州人の得点が日本人よりも有意に高かった ( $F(1, 70) = 6.53, p = .01, \eta^2 = .09$ )。

認知的処理では、“理解できる”において鑑賞者の背景文化の主効果が有意であり ( $F(1, 70) = 18.17, p < .01, \eta^2 = .12$ )、交互作用も有意であった ( $F(1, 70) = 12.41, p < .01, \eta^2 = .08$ )。単純主効果検定の結果、西洋画において日本人よりも欧州人の得点が有意に高かった ( $F(1, 70) = 37.02, p < .01, \eta^2 = .35$ )。

感情的処理では、“嬉しい”において鑑賞者の背景文化の主効果が有意であり ( $F(1, 70) = 4.94, p = .03, \eta^2 = .04$ )、日本人よりも西洋人の得点が高

かった。また“興奮している”、“好き”に関しては交互作用が有意であったため、単純主効果の検定を行なった。“興奮している”では、西洋画、浮世絵双方の水準において鑑賞者の背景文化の影響は有意ではなかった。“好き”では、西洋画において、欧州人の得点が日本人よりも有意に高かった ( $F(1, 70) = 6.61, p = .01, \eta^2 = .09$ )。

既知感と評定得点の関係を調べるため、目的変数を各形容詞の得点、説明変数を既知感の得点とする回帰分析を行なった。結果、全ての形容詞対において有意な回帰係数は確認されなかった。

## 考察

多変量分散分析の結果、全ての処理において鑑賞者の背景文化と絵画カテゴリの交互作用が有意であった。鑑賞者の背景文化の影響は画一的なものではなく、絵画カテゴリによって異なる影響があることが示唆された。また、既知感を説明変数とした回帰分析の結果は、本実験の結果は既知感に依存するものではないことを示している。

Leder et al. (2004) のモデルでは知覚的処理はボトムアップ的処理で、文化差の影響は小さいとされている。しかし、本実験の結果では“明るい”、“はっきりしている”といった知覚的処理に対応する形容詞にも文化の影響が現れている。線分の長さ知覚において文化の影響が見られることを Kitayama et al. (2003) が報告しており、芸術体験における知覚的処理にも認知的処理・感情的処理と同様に文化の影響が見られることが示された。

## 謝辞

本研究は、総務省「次世代人工知能技術の研究開発」の助成を受けた。

## 引用文献

- Kitayama, S., Duffy, S., Kawamura, T., & Larsen, J. T. (2003). Perceiving and object and its context in different cultures: A Culture Look at New Look. *Psychological Science, 14*(3), 201–206. <http://doi.org/10.1111/1467-9280.02432>
- Leder, H., Belke, B., Oeberst, A., & Augustin, D. (2004). A model of aesthetic appreciation and aesthetic judgments. *British Journal of Psychology, 95*, 489–508. <http://doi.org/10.1348/0007126042369811>